

## 米軍、国際空挺部隊 恒例の「降下訓練始め」で大空を舞う *Wings of Unity: US, international airborne forces soar in annual New Year's Jump*

January 12, 2024

By Airman 1st Class Natalie Doan  
374th Airlift Wing Public Affairs

1月7日、第36空輸中隊の空兵は、千葉県・習志野演習場で行われた「降下訓練始め」で戦術空輸の展示を行った。「降下訓練始め」は陸上自衛隊第1空挺団が演習場を一般開放して行う恒例の年頭行事となっている。

1960年代から続くこの行事は、陸上自衛隊空挺隊員の1年の降下安全を祈願するとともに、インド太平洋地域の平和と安定を守る共通の目標を新たにし、同盟国間の絆を深めることを目的としている。

今年は厳しい気象条件の中、第36空輸中隊はC-130Jスーパーハーキュリーズ3機から陸上自衛隊の空挺隊員30人を投下した。

第36空輸中隊運用指揮官補佐のチェイス・ヘスマン少佐は、「降下訓練始め」の任務指揮官を務め、第1空挺団と第36空輸中隊の強い絆を認識した。

「降下訓練始めは、各国の空挺部隊が集結して行う共同訓練である。団結を象徴するものであり、国際的なカウンターパート部隊とシームレスに連携する力を示すものだ」とヘスマン少佐は話す。

習志野演習場では、第374空輸航空団の幹部らが、木原稔防衛大臣を含む9千人の日本の来場者とともに第36空輸中隊の飛行展示を見守った。日本、米国、カナダ、フランス、英国、ドイツ、インドネシア、オランダ、カンボジアを代表する9か国の来賓も出席した。

そして各国の空挺団の指揮官たちは、陸上自衛隊第1空挺団長の若松純也陸将補と記念品を交わした。第36空輸中隊司令キラ・コフィー中佐は、若松陸将補への感謝の言葉を刻んだC-130Jプロペラ・ブレードのレプリカを贈った。

「降下訓練始めは、第36空輸中隊と第1空挺団との年次の二国間協力の幕開けとなるものだ。二国間の強い連携は、敵対勢力を抑止する上での空挺作戦の重要性を強め、一丸となって課題に対処し、地域の安全保障に寄与する準備態勢を確実にする」とコフィー中佐はコメントした。

降下訓練始めは、1月5日に開催された国際空挺指揮官会議のわずか数日後に行われた。大規模な統合部隊作戦を練るため、会議には計9か国の空挺部隊と支援部隊が集まった。

訓練の中で上級幹部たちは、永続的な平和と安定のためにインド太平洋地域における軍事的プレゼンスを示す重要性を強調した。

「空挺作戦において空軍の役割は極めて重要だ。我々の使命は空挺部隊を運び、その支援を担うこと。そして空挺部隊が敵地を制圧し、地上作戦を行う際の兵力を増強させることだ。空挺部隊と地上部隊は、熟練した一つのチームとしてシームレスに統合することが大事である」と第374空輸航空団司令官アンドリュー・ラダン大佐は語った。

